D. H. ロレンス：『堕ちた女』
——主体性を求めて——

D. H. Lawrence : *The Lost Girl*
——In Search of Identity——

尾形　隆夫*
Takao Ogata

（1）

David Herbert Lawrence（1885～1930）の *The Lost Girl*[1]は，1920年に出版されたが，実は8年前1912～3年に，The Insurrection of Miss Houghton『ミス・ホートンの叛逆』の題で，200頁ほど書いて放棄している．この原稿は残念ながら現存していない．その間に初期の自伝的傑作 *Sons and Lovers*（1913）と，代表作 *The Rainbow*（1915）およびその第二部ともいうべき *Women in Love*（1920）の執筆があった．

The Rainbow は，警察裁判所によって，わいせつであると宣告され，出版社は罰金を科せられ，発刊部数はすべて廃棄処分にされた．ロレンスにとってこれはかなりのショックであったにちがいない．

1919年ロレンスは読者に読まれる小説を書きたかった．ドイツ人教授 Ernest Weekley の夫人 Frieda との結婚（ロレンスより四つ上の31歳で，3人の子供を前夫のもとに置いて）が原因で，イギリス政府からドイツのスパイと疑われ，尾行されたりして困り切っていた．当時友人につぎのように書いている．'I shall do a novel about Love Triumphant one day.'「これまでの手法とまったく違ったもので，今日求められているものに対して一つの解答がある．英国人が心の底から求めているものに対する解答がある」とロレンスは D. Garnett に書いている．ここに *Sons and Lovers* の苦労と成功にもとづく自信のほどが見える．*The Rainbow* が1915年に発売禁止となり，*Women in Love* も英米ともに議論を巻き起こし，ロレンスはとても出版は不可能と思ったらしい．この時期のロレンスは，まともな小説を書いて金銭問題を解決したかった．

8年後，途中放棄した形の作品を，1920年の春8週間で書きあげている．

（2）

以下女主人公 Alvina の個性と，自己発展に限定してストーリーをたどってみる．

アルヴァイナの父 Mr. Houghton は，Midland にある人口1万人の小さな町 Woodhouse の服地商人で，ロレンスの生まれ故郷 Eastwood をモデルにしている．彼は大通りに面した堂々たる構えのマンチェスター商会の主人で，アルヴァイナは何不自由ない名門の一人っ子として生まれる．母は病弱で，家庭教師として住み込む Miss Frost の厳しい養育を受け，将来はレディ

*英語専攻

となる筈であった.

教育の効果あって，しとやかで思いやり深く，高い知性の娘に成長する．ほっそりとして上品な容姿，細面の華奢な顔立ち，やや中高の鼻と美しい青い瞳，容貌と物腰は中産階級の貴婦人の資格を十分に備えていた．ただまぶたの動かし方に，時折妙に人を馬鹿にしたところがあった．まだ学校というものに行ったことがないが，愛する家庭教師からいろいろの事を教わり，ピアノを弾き，組合教会に行き，そのコーラス部に入り，そこでの社会活動に参加した[2]．幼少の頃から何かの拍子に発作的に浮かれ騒いだり，反抗的にあたり散らしたりした.

ところで，ホートン氏は，地に足が着いていないフワフワした存在で，現実を直視せず，夢を追う人間として描かれる．「蝶のように店の服地の上をひらひら飛びまわったり」[3]，「ふさぎこんで部屋の隅で翼の下に顔を埋めたり」[4]，「羽が抜け落ちたような様子」[5]をしたり，陽気になったり，しょげこんだり，つぎからつぎに事業を興しては失敗する．そのうち病身の妻が死に，その一年後には家庭教師のミス・フロストも病死する．服飾店から始めて，煉瓦製造に手を出して大損をし，そのあとには質の悪い石炭の出る炭鉱に熱中し，さいごは村落のこわれかけた芝居小屋を買い取り，ミュージック・ホールめいた演芸と映画の劇場をはじめる.

そこにたまたま公演に来た Natcha-Kee-Tawara 一座（マダムと4人の青年）の中の一人 Cicio にアルヴァイナは心を引かれるものを感じる．彼女はピアノを弾き，ミス・ピネガーは切符売りである．別の一座が来ている時，ホートンが切符売りをしていたが，その場で意識を失い，その翌日死ぬ．彼の描写は実に生き生きとしている．Dickens 風に喜劇的で，落着かず，そそっかしく涙もろくお調子もの，そのくせ金銭欲は人一倍強い．寝室のベッドを大きくつくりすぎて，妻ははしごを使って昇らないとベッドにたどりつけないといった具合である．ミス・フロストはマンチェスター商会を細腕で支え，忍耐強く，アルヴァイナを良家の子女として養育せんと努力する.

ミス・ピネガーは一家を支えるもう一つの柱で，主人 James を仕事に追い立てるさまはコミカルである．ジェームズ・ホートンが「疲れ切って翼の下に顔をつっ込んでうずくまっていると，彼女がやってきて，まるで人目をぬすむ猫のように彼を仕事場へと追い立てた.」[6]

この小説中，一番コミカルな人物は Mr. May である．この山師は一文無しの興行師として現われ，ジェームズのマネジャーとなる．調子のいい人間で，一座のマダムが病気で出演できないときは，代役を買って出て女装したりする．彼はピネガーと仲が悪く彼女が苦手である．そのドタバタ劇は人間離れをして，戯画化されている．舞台で気ぜわしく立ち働き，「もちろん，もちろん」と相槌を打って話す姿は「まるで鳩時計のようであった.」

ほかにアルヴァイナの求婚者たち，オックスフォード大学生 Albert Witham や Dr. Mitchell などの喜劇的人物がいる．二人ともインテリであるが，アルヴァイナをわがものにして服従させようとする自己中心的意図だけが目立つ.

この作品の出発点では，Bennett 流リアリズムを駆使して，ベネットの *Anna of the Five Towns* に対する reaction として書かれたところがみられる．アナが金もうけだけが目的の父の言うなりになって結婚し，いろいろな苦労に耐えるストーリーをみれば，アルヴァイナと正反対の性格をもっていることがわかる．因みに *The Lost Girl* のタイトルは本来 The Insurrection of Miss Houghton であったことを思い出せば，ロレンスはアナと反対の女性を描きたかったことが一層明瞭になる．アルヴァイナは家族の反対を押し切って生活の自立を考え，結婚の相手も適当のところで妥協することなく，金の力だけとか知性だけではなく，本当に女性を人間として尊重してくれる男性が現われるまで結

婚しない．遂には貧しいイタリア人で，英語で会話もあまり通じない5歳年下の旅芸人と結ばれたのである．

（3）

アルヴァイナが恋した男性はどのようなものであったか．23歳の時 Alexander Graham と恋仲になる．彼は Edinburgh 大学に学位をとりにきたオーストラリア人の医師で，浅黒い肌，黒々とした瞳に惹かれ，母親やミス・フロストの反対を押し切って婚約してしまう．彼女はずるそうな，半ば愚弄するような無謀さを秘めた表情をしながら，グレアムには胸をわくわくさせて興奮する．それはミス・フロストにとって苦痛であり，洗練されたレディには異様で，不吉な予感を与える顔付きであった．結局グレアムはアルヴァイナが遅れたため，ひとりで郷里に帰った．フロストは元の愛らしいアルヴァイナを取りもどそうと努力するが，それは「精神と官能（heart against sensuality）」の闘いであった．アルヴァイナはやっと落着きと優しさをみせるようになったが，彼女の内面は二つに分裂する．ミス・フロストの信条とする価値基準の支配する昼の世界——ここではグレアムは彼女の愛に価しない劣等者となる——と，ミス・フロストの否定する夜の世界——彼の暗い情熱を受け入れようとする——この二つである．しかし結局フロストの意見に屈服して婚約は破棄するのである．

この事件から，52歳のフロストは急速に自分の影響力が失われてゆくのを知る．そしてアルヴァイナはフロストの絶対的価値観から解放される．これを契機に彼女は生き埋めの如きウッドハウスの生活から抜け出そうとする．そして助産婦の資格を取るため故郷を出る．良家の子女としては，当時は考えられない行動である．イズリントンの学校生活での彼女には目をみはるものがあった．彼女には明るく，決然とした落着きがある．おいしくない食事，不潔な空気，下品で粗野な仲間，といった環境の中で，彼女は生き生きとし，血色もよく，肉付きもよくなり，人づき合いも上手になって生活を楽しんだ．スラム街へ実習に出ても，貧苦にあえぎ苦しむ人々を嫌ったり，ひるんだりすることなく，かたくなな病人も適当に手荒く扱って要領よくさばいた．

彼女の内奥には，表向きの立派さと裏腹の暗い奔放な活力が脈打っている．成長期に時折みせつけた嘲笑的態度や発作的な馬鹿騒ぎは，表向きの上品さに押さえこまれていた裏側のエネルギーのふき出したものにほかならない．ミス・フロストはこういうアルヴァイナを見てぞっとする．なぜならアルヴァイナの中に目覚めてきた暗い血の活力は，生命の根本から流れ出る古い盲目の力であり，人間社会の約束事や常識では制御しきれないものだからである．町の青年たちは彼女を敬遠する(7)．

病院の若い医師たちは，看護婦に対して気安く近づいてきて，触ったり抱きしめたりするが，彼女はとくにそれを嫌ったりもしない．むしろ挑発的な身のこなしや流し目で面白がっている．しかし男たちがしつこく迫ったり，許しがたい行動に出るときは，彼女は突如として超人的力が湧き上ってきて強固に拒絶する．しかしその後は，またただの普通の愉快な女にもどる．医師たちは彼女が好きであったが，それは気楽に扱える普通の女としてではなく，「まるで女そのもの，つまり個人的属性をあまりもたない別の存在」(8)としてむしろ彼女に奉仕したがるところがあった．

このようなアルヴァイナの姿は，始源の女の絶対的な活力と威厳を示し，*The Rainbow* における Anna や Ursula の巨母的側面を思わせ，自分の暗い躍動に充分応えうる力量をもたぬ相手に対しては，容赦なく貪り尽してしまうような嗜虐性を示す．これがロレンスのヒロインによくみられる特性である．弱々しい内気な繊細なレディとして登場したアルヴァイナも，ここへくるとまぎれもないロレンス的なヒロインの一人であることがわかるのである．

（4）

イズリントンの経験によって，彼女の心の内面に抑圧されていた別の側面が，ようやく彼女の本質にかかわるものとして，アルヴァイナの意識や表面に現われてくる．

故郷に帰ると，はかばかしくない家業にあくせくする父と，持病の悪化で寝たきりの母親と，二人のオールドミスとの毎日が続く．アルヴァイナは助産婦の白いユニフォームを脱いだ時からその生気・血色・肉付きは失われていく．24歳なのに老けて痩せぎすで青白い顔をしている．

6カ月の看病で母は死去するが，その間アルヴァイナは母の枕辺にじっとすわり続けた．これはイズリントンでの活動的な生活とは対照的で，実に暗い日々であった．彼女は古い躾を身につけた女性らしく，背筋をぴんと伸ばして身動き一つせずに長時間すわり続けることができた[9]．

この描写に現われるアルヴァイナは，ペニー硬貨の裏である．「ペニー貨の表をひっくり返して裏を出しても，それによって表を否定したり欺いたりしたことにはならない．それは自身の補完のための調整を意味するにすぎない．高い精神性についても同じである．それはメダルの片面でしかない．……

それでアルヴァイナは自分のメダルを廻した．彼女のメダルは裏が出た．表か裏か．何世代にわたって表だった．今度は裏の番だ．」[10]

ここでのアルヴァイナは，名門の何代にもわたって見せてきたメダルの表側，彼女の血筋の衰弱した部分といえる．しかし裏側には，暗いダイナミズムが存在する．

母の死後，家事の切り盛りに活動する彼女には，主婦としての自覚と積極性が出てくる．ミス・フロストに対しては以前のように甘えたりもするが，それは外面だけで，内実はすっかり変っている．「その甘えた素振りの下でアルヴァイナは冷たく独立していた．彼女は自分でやりたいと思ったことは何でもやり通した．」[11]

このミス・フロストも，母の死後一年足らずで肺炎で死んだ．アルヴァイナは，いよいよ自立の気持があふれてくる．

26歳の時，結婚への執着と焦りから，出入りの配管工 Witham の弟と交際を始める．この男は Albert Witham という Oxford 大学の学生であった．しかし結婚までゆかず，彼女の方から相手に不愉快な気持を与えて終った．

その後，家事と日曜日の聖歌隊と教会の行事に参加，友だちとおしゃべりをしたり，ゲームなどをしたが，娘盛りの美しさは消え，オールドミスになりかかっていた．

父は石炭採掘業に失敗してから，今度は古い小屋を改造して，映画と実演の興行を始める．数本の短篇映画とバラエティ・ショーを企画し，ミス・ピネガーに入場券を売らせ，アルヴァイナにピアノを弾かせようとする．ピネガーは，そんなことはまともな人間のすることではないと反対するが，結局ホートンの要請を受け入れる．初日にピアノを弾いたアルヴァイナは，これがそれほどひどい仕事でもないとわかる．そして彼女はだんだん活動的に，庶民的になり，イズリントンの生活と似てくる．

アルヴァイナは，ピネガーに代表される中産階級に対する反目をはっきり自覚する．

上品ぶった無為の生活が，いかに空しく，そして自分の生への欲求を抑圧するものであるかを知る．

「大まかに言って，アルヴァイナはシネマを，またそれが彼女にもたらした生活を楽しんだ．彼女はその生活を受け入れた．それで彼女の物腰はいくぶん安っぽくなった．彼女はデクラッセになった――つまり彼女の属する階級から脱落した．品位を重んずる商人の娘達は，今や彼女を避け，遠くからしか挨拶をしなくなった．彼女はメイ氏とできていると思われていた．

アルヴァイナは気にしなかった．彼女はむしろその方を好んだ．デクラッセ（＝社会的に没落した）である方を好んだ．アウトサイダーで

ある方を喜んだ．遂に自分自身の立場に立てるようになった，と彼女には思われた．」[12]

一個の人間としての自立は，世間的な評価では，堕落とみなされている状態と密接に結びついている．これはベネットのアナの如く，逆境に涙し，耐える悲劇のヒロイン的タイプの女性ではなく，したたかな近代的な女性である．世間の目には堕ちたとみなされても，彼女にとっては新しい世界の発見であり，またそれに敏感に反応する新しい自分自身の発見でもあった．

（5）

劇場に入れ替りにやってくる旅芸人たちの価値観は，村人の常識，モラルとは全く違っていた．その一つにナッチャ・キー・タワラ座があって，これは座長のマダムとそれぞれ国籍の異なる四人の青年から成っていた．その中で一番の変人であるチチオは他の青年たちとよくけんかをする．男たちはチチオを劇団から除名してもらいたいとマダムに訴える．アルヴァイナは何故かこの男に気を引かれる．

南イタリア出身で無口，浅黒い肌，美しい黒髪，いつも半ば痴呆的な薄笑いを浮かべ，英語をうまく話せない．黒いまつ毛におおわれた茶褐色の瞳に彼女は独特の魅力を感ずる．チチオはけんかがもとで劇団をやめようとするのを，アルヴァイナが説得したことがきっかけで，二人は急速に接近する．二人には暗黙の結びつきができる．彼は暇さえあれば，冷たい無表情な視線で彼女をじっと見つめる．

彼女の父が急死して，葬式にはマダムとチチオが代表で参列する．肉親は皆死んで，家は没落し，孤独な彼女はナッチャ・キー・タワラ座を追いかけ団員にしてもらう．入団許可を得た彼女は，マダムの指示でチチオと二人だけの部屋を与えられ，はじめて肉体的に結ばれる．彼女は涙を流したが歓喜のクライマックスは味わえなかった．強烈な抹殺・麻痺の感覚を覚える．これは愛し愛される者の快感としてはやや不思議に思われるが，彼女の硬直しつつある性の受容性を柔らげるためには，まず自己防御の固い殻を打ち破る必要があると思われる．さらにそういう役割を担う男が，太古の暗闇から現代文明に迷いこんできたような，非人間的で非知性的な存在そのものとも言うべきチチオであったからに他ならない．

チチオを知ることによって，彼女の高い知性の壁を打ち破って，没知性の深部にある情熱に目覚めたアルヴァイナではあったが，今度は，その没知性の部分にのみチチオとの接触が限定されてしまうことになったのだ．従って彼女はチチオの暗い未知の美しさに圧倒される一方で，或る面では否定され無視された苦々しさを感じないではいられなくなる．彼女の内面は，昼の世界と夜の世界に大きく分裂し，新たな苦悩に苛まれるようになっていくのだ．

チチオとの一夜が明けた朝，食卓で彼女は二人の関係が皆に公表されると期待していたが，男の態度は冷淡で無口で視線も合わせてくれない．彼女は腹を立てて座を立ち，一座は気まずくなり，彼女も自分は皆の邪魔者であると思いこむ．しかし彼女の深部にひそむ情欲はチチオによって満たされることを求めてやまない．一つには怒りと口惜しさのため，一つには充足されない愛のために，チチオに向かって燃える心を彼女はどうすることもできなかった．しかも，「彼女は直感的に，彼はわたしを永遠に無視するだろうとわかっていた．」[13]

（6）

残された不動産や負債の整理を顧問弁護士に依頼するが，父の遺産はほとんど借金の返済で消えていた．一座にもどっても，金をもたぬ彼女への皆の態度は冷たい．しかしチチオは結婚してくれと迫る．「愛と結婚は別でしょう」といって力づくで迫ってくる男に対しては無力であった．

「怒りで青ざめ，黙りこんで身動きもせず，彼女は成り行きにまかせた．彼女は自分が古い足場から永遠に切り離されて，彼の意志の未知

の暗い奔流に流されるままになった.

運命が我々を押し流す時間というものがある．今やアルヴァイナは，自分が何処へとも知れず押し流されていくのを感じた．それは黒い顔と半透明の黄色い目をした人の住む薄暗い場所であり，言葉は通じず，生活も違っている，そういう場所であった．それはまるで，自分の世界から他のもっと暗い天体へ落ちていく――そこでは言葉の意味がすべて違っている――ような感じであった．彼女は一人ぼっちだった．そして彼女はそれが気にならなかった．むしろ望むところだった．恋人の情熱のさなかにあって，彼女は孤独を見出した．自分を包んでいる影のように，素晴らしく涼やかで甘美な完成の感覚であった．それは静寂と完全の一瞬であった.」(14)

これは突然アルヴァイナを襲ったチチオの情熱であったが，彼女の立腹にもかかわらず，何か運命のような避けられない出来事として受け入れたのである．瞬間的に燃え上った情熱は，人間的な情愛の交歓というよりはむしろ，チチオの肉体を通じて現れた天啓とでもいうような異常な感覚を彼女に与えた．そしてこの抱擁の後，彼女はわけのわからない程の幸福感に酔う．彼の暗い捕え所のない美しさを思うと思わず跪きたくなる程である(15).

さて一座は警察に疑われる．白人奴隷売買の疑いで，警察が周囲をうろうろしはじめ，どうやらアルヴァイナが原因らしく，彼女の立場は一層悪くなり，いたたまれなくなって，新聞広告で知ったランカスターの公立病院に仕事を見つける．ランカスターに行ってからの彼女は，別人のように快活になり，すべてがうまくゆく．助産婦という職業が彼女に適していた．再び健康になり，肉付きもよく，魅力にあふれ，社交的で落着いた態度がみられた．婦長にかわいがられ，彼女を中心に町のインテリ女性たちのグループが出来てアルヴァイナもそれに加わり，知的会話を楽しみ，文化的雰囲気にひたった.

かつては名門の令嬢が助産婦という職業婦人に身を落としたのであったが，今度は流浪の貧しい旅芸人から，公務員という安定した体制のメンバーに上昇したのである．仕事の上で直接の上司であるミッチェル医師に，彼女は接触することとなった．彼は54歳でスコットランド出身，貧困の中に苦学して現在の地位に登る．貧乏な患者の扱い方が上手で，大声で叱りつけたり，荒っぽい治療をし，絶対的権威風をふかすので，アルヴァイナは憤慨する．しかし病人たちには評判がよい．傲慢な態度の裏に，成り上り者の虚勢をみやぶり，彼女はこの胃弱に悩む医師を好きになれない．彼は彼女をお茶にさそい，豪邸にまねいて，ドライブにさそって，求婚する．結婚すれば初老の男でも生活の苦労はなくなる．彼女は現実的打算的判断と，本能的非打算的心の選択に迷った．一方的に婚約指環を渡される．この窮地からのがれるため，丁度第一次大戦が始まったので従軍看護婦に応募しようと思う．このミッチェル医師が「結婚したがっているのは，彼女を完全に所有するためであり，一人ぼっちにならないように常に彼女を傍に置いておくためであった.」(16)ここには自己本位の所有欲，幼児の如き依存心しかみられず，とても彼女は我慢できない．しかし婚約が新聞に発表されて，困り切って，いよいよ従軍看護婦として戦地に行こうかと思っているところに，偶然チチオに再会する．彼の劇団は解散し故郷イタリアに帰るところで，一緒にイタリアに帰ってくれと求婚を迫る．判断がつかず三日間悩んだあげく，半ば発作的にチチオに電報を打つ．ホテルでチチオに会うと，彼の秘術めいた吸引力に次第に屈服してゆく.

「彼は暗い目に見えぬ力であった．彼女に頓着しなかった．男の動きがこんなにも柔かく穏やかで，しかも無頓着になれるものだろうか．何故彼女は抵抗できなかったのか．まるで魔法にかけられたようであった．彼女はその魔法と戦うことはできなかった．何故なら彼があまりにも美しく思われたからだった．…彼女は古代

の聖なる娼婦の一人になったような気がした.」[17]

（7）

アルヴァイナの男性遍歴も遂に終った．しかしチチオとの結婚は，誰にも論理的に説明できるものではなかった．オーストラリア人の医師グレアム，ウィザムの弟アルバート，ミッチェル医師．こういう男性たちが，チチオよりも数段すぐれた結婚相手であることは誰の眼にも明らかである．チチオはイタリア人であり，英語もほとんど話せないし，教養もないし，職もない．チチオ以外の彼等とは，昼の世界（知性と意識の世界）は共にすることができても，夜の世界（無意識の世界）を共有することはできなかった．本能的な性の支配する世界――理性・道徳・常識などの価値基準の及ばない夜の世界を共有することができたのは，チチオという異邦人とだけであった．

しかし二人の結婚生活にあっては，お互いの親しい語らいによる親密な夫婦生活は無理であった．チチオの呪縛にかけられたような催眠状態の中で，彼の影になったかのように柔順に従うだけであった．彼女の知性・判断力は，チチオの暗い毒によって昏睡に陥ってしまっているのだ．しかしチチオは逆に，彼女と結婚して自信と誇りが出てきたのか，あるいは彼女の絶対的服従のせいか，彼の内部から花開くように男らしい魅力が現れてきた．アルヴァイナと無意識の次元で豊かな性を享受した後で，チチオは昼の世界において自信と決断力に富んだ男性に変化していった．第三者には非常識で不自然な結婚も，二人にとっては適切なものであったことを，このことは示している．

二人は11月はじめ連絡船上からドーバーの崖を眺めながらイタリアに向かう．小説最後の三章は，ロレンスが妻フリーダとイタリアに逃亡した体験が色濃くにじみ出て，美しい旅行記としても読める．

「アルヴァイナの心臓は突然ちぢみあがった．船が静かに左右に揺れたとき，彼女はチチオの腕につかまった．それは西空一面に光る夕日の背後にイギリスがあったからだ．海のかなた，イギリスは灰色の，死体の色の絶壁とともに浮かび上がった．その上は丘陵地帯が幾筋かの雪におおわれていた．イギリスは今，長い灰白色の棺のようになって，徐々に沈んでゆくところであった．彼女はじっと見つめ，魅せられ，恐ろしくなった．それは日の光を拒み，経帷子のような縞模様の雪をのせ，暗い影にかくれ，長々と灰色で死んでいるようであった．あれがイギリス！　彼女の心はその灰色の中心部ウッドハウスへ飛んでいった．ああ故郷よ！

彼女の心は消え入るばかりであった．これ程に一人ぼっちになって遠くに引き離された感じがしたことは今まで一度もなかった.」[18]

このようにイギリスを夕日の中にみつめる光景は，風景描写がそのまま心理描写であるような文体で描かれている．祖国イギリス，故郷ウッドハウスの町との最後の絆が断たれようとしている彼女の心情が，悲痛な率直な形で示される．

そしてこれから行く未知の国イタリアは，チチオの故郷ではあるが，今の彼女にとっては，頼りとすべきチチオは，たとえ彼女のそばにいたが，「ほとんど何者でもなかった」[19]のである．チチオとのつながりは夜の世界であって，昼の世界ではチチオは決して彼女をやさしくなぐさめてくれることはない．

フランスを横断してイタリアに入り，南下してナポリに至るまでの長い列車の旅の間にも，二人はそれぞれの思いにふけり，語り合うことはない．生きるため旅芸人となって各地を放浪し，イギリス娘を妻にして貧しい故郷の山村に帰るチチオの心中は，アルヴァイナには測り知れない複雑な思いがあるだろう．彼の憂うつな表情をみて，「結局私の苦しみではない」[20]という理由で関与しない．

車窓に映るアルプス山麓の田園風景や河や湖などを眺め，はじめて見るアルプス地帯の中心

部の壮大な自然の美しさに感動する.「イギリスのちっぽけな完成から逃れて，偉大な大陸の壮麗な未完成に入るのはどんな感じか初めて実感」[21]するのである.

彼等二人は山奥の故郷近くの駅で，彼の叔父の出迎えを受けて，それからまる二日かかって，11月の夜遅くチチオの故郷に到着するが，極度の疲労と空腹と寒気と興奮の中，半ば失神するように眠ってしまう．夜中あまりの寒さに目を覚ますと，月の光が部屋の中まで明るく照らしていた．一瞬自分が今どこにいるのかわからなくなって，息の根も止まりそうな恐怖に襲われる.「どうしたらよいのだろう．どこに逃げたらよいのだろうか．全く途方にくれてしまった.」[22]耐えられなくなって彼女はチチオの床に入りこむ．彼の身体は暖かかった.「夫の力強さと暖かさが彼女の身体の中を浸し，意識が消えていくのを感じた．彼の体内の狂暴な情熱が再び彼女の意識を完全に奪った.」[23]異郷の第一夜はこのように過ぎた.

（8）

チチオはその後，彼女をいたわる言葉をかけるでもなく，抱擁もしない．名門の一人娘として大事な扱いを受けてきたアルヴァイナにとっては，故国を遠く離れたイタリア山奥の生活であっただけに，これはかなりの試練というべきものであった．しかし，やがてそれが甘い考えであることがわかってくる.

妻の支えを必要としたのは，むしろ夫の方である．雪の深く積もる山々や，谷間の神秘な力が人間の生気を吸い取るようであった．この強大な大自然の抗し難い力に抹殺されないように，チチオとその叔父は彼女にしがみついているようであった.「実は彼女が二人の男の魂を支えなければならなかった.」[24]大自然の威力は圧倒的で，人間の存在など極めて卑小なものと痛感する.

冬の夕暮，紺青の空をバックに，バラ色に燃え立つ白雪の山々を仰ぎ見て，その美しさに魂を奪われる．彼女の親しんできたキリスト教の神とは全く異質の，残酷で荒々しい威力に満ちた自然神の存在を感じる．彼女が一人で山中に入るとき，彼女はまるで自分がいけにえに捧げられたように，狂気に似た幸福感に襲われることがあった.

キリスト教世界から抜け出て，言葉以前の世界へ迷いこんで変身したような感覚を味わう．彼女の疎外感，孤独感はそれほど大きかったのである．現実の故郷ばかりでなく，精神的風土からも断絶されたような危機感と違和感をいだくが，一方，新たな再生，解放感も意識している.

言葉を介さない夫婦生活も，妊娠をきっかけに愛情も安定してくる.

アルヴァイナは村人に大事にされる．それは自分が優れた人間と思って奉仕してくれるのかと思っていた．やがて，それは彼女がイタリア人ではなく外国人であり，いつかここを去って行く人であるからだと知らされる.

村落の人間同志では，陰口をたたいたり，だましたり，すべて金銭づくの生活であった．彼女の叔父も，アルヴァイナと一緒の家に住んでいることから，村人から意地悪な嫉妬を受ける.

春は木々の芽が萌え出ると，野辺にひざまづき，自然の産んだ可憐な花を手に涙を流す．しかし自然賛美とは裏腹に，彼女の心には，土着の人々や生活習慣に対する嫌悪感がつのってくる．彼女のこうした気持は，一度は捨てたイギリスの文化が彼女にしみこんでおり，そのモラル，清潔さなど，イギリス女性の美的感覚がアルヴァイナの心の中に生きており，それがイタリアの山奥の人々に反発しているということである．小説の最後の二章あたりでは彼女はあまりイギリスを否定的に言わなくなっている.

叔父の家は大きいが部屋数がすくなく，台所兼居間と寝室の二部屋しかない．台所は暗く丸天井の洞窟のようである．薪の煙と煤と脂ですべて汚れ切っている．男二人が出かけると，彼

女は食器類を熱湯で煮てみがき上げる．テーブルやマントルピースもごしごしこすってきれいに洗い流した．しかし彼女が風邪をひいて気管支炎で寝込んでいる間に，チチオが寝室に暖炉をつくってくれ，やっとこの部屋で縫物をしたり，羊毛を紡いだり，読書をすることができた．

しかし彼女は土地の生活に決して同化しようとしなかった．あくまでもイギリス人の主婦にふさわしい快適な清潔な生活を守った．夫のチチオは，土地の人々と大いに語り合う．妻との知的会話は決してやらず，彼女が夫に語りかけると口をつぐんで嫌な顔をする．彼は「英語では決して議論しようとしなかった．」(25)

やがてアルヴァイナは，夫が妻の知性を無視するやり方には不満であるが，一方夫の無言の存在感に独特の幸福感を味わうようになる．清潔で気持のよい部屋に，夫が黙って坐っているだけで，十分に満たされている．「彼女は，彼の豊かで生まの肉体が息づいているような沈黙が好きだった．彼女は二度と彼は遠くに離れていかないだろうと感じた．またカリファーノ（村の名）では，彼も彼女と同様に他所者であり，お互いの存在に，同じ位強くすがりついていることも感じていた．」(26)

アルヴァイナとチチオは，夜の生活を共有しながら，昼の世界は，個別の充実した生き方をすることによって，遂にバランスのとれた夫婦関係を確立する．

第一次大戦にイタリアが参戦したため，チチオも出征しなければならなくなった時，取り乱すのは妻ではなくて夫であった．チチオは二度と帰ってこれないだろうと泣くが，妻は「あなたなしでは私はここに一人でいつまでも居れません．イングランドに行きます」(27)と言う．「希望を持ちなさい．メソメソして大騒ぎをするものではありません．帰ってくるという決意さえあれば帰ってこれるのです．だからはっきり決心しなさい．……どこに住んでいようと，とにかく私の居るところに帰ってきなさい．」チチオは「もどってくるよ．そしてアメリカに行こう」(28)と答える．

（9）

400頁の長編小説を，女主人公の精神的発達の過程に視点を据えて，ストーリーを単純化して解説してみた．勿論ここでは，ロレンス夫妻のイタリア体験との比較，作者のイタリア生活に対する期待と共感と幻滅，異教に対するロレンスの考え，インディアン一座の件，近代産業主義に対するロレンスの考えは一切排除してふれなかった．これらの問題は稿を改めて十分に考察するに足る重要なテーマである．

ここでロレンスの他の作品との関連において男性の人物像を考えてみる．ロレンスは，ほぼ三つのタイプに登場人物を描いたと考えられる．

1. sensitive なインテリ
   Sons and Lovers の Paul Morel
   Women in Love の Rupert Birkin
   Kangaroo の Richard Lovat Somers
2. passionate な動物的人間
   The Lost Girl の Cicio
   Lady Chatterley's Lover の Mellors
   The White Peacock の Annable
3. 力強いリーダー的人物
   The Plumed Serpent の Don Ramón
   Aaron's Rod のRawdon Lilly

この三つを備えた理想的主人公は，ロレンスの小説には登場していない．こう考えてみると，この小説のテーマとして，つぎのように言えるのではないか．〈アルヴァイナが知性と情熱を兼ね備えた男性を，結婚相手として見つけられないならば，後者つまり情熱をもった男性を選びたい，というのが彼女の気持である〉

（10）

この小説のイギリスでの売れ行きは最初の1カ月で2,000部，プラス年内に600部で，ロレンスが望んでいたほどの大成功とは言えなかっ

た.

評判も大したものでなく，批評家はまだロレンスの前作 *The Rainbow* の発禁を冷笑していた．Manchester Guardian 誌に Garnett は皮肉なお世辞を書いた．「『虹』のあとで実にほっとする.」Nation 誌は『虹』より良いといった．Arnold Bennett は（実はロレンスはこの作家の手法を模倣したのであるが），'I loved it' と言ったというが，活字になっておらず，これはロレンスにとって残念なことであった．さらに，この作品がベストセラーになる，という Bennett の応援の言葉も，Bennett のよく知る中産階級の読者には聞かれずじまいであった．ところが Virginia Woolf は 'We are disappointed' と堂々と批評し，John M. Murray は 'a sad decline' と書いた(29).

しかしアメリカでは批評，売り上げ（5,000部）ともにイギリスよりもよく，New Republic 誌は，'a searching work of art' と言い，New York Nation 誌は 'memorable and instructive' と誉めた．ロレンスは最初の6カ月で250ポンドを得，一応ほっとしたが，財政的苦境を脱するまでにはとても及ばなかった．

イギリスでは，売り上げと同じ位の金額を，Edinburgh 大学の James Tait Black Prize から得た．これは1921年の the best novel として与えられた100ポンドであった．これがロレンスの得た唯一の賞である．結局，この作品は読者の共感が得られなかった．それは何故であろうか．主人公アルヴァイナは，時には冷淡，気まぐれ，自己破壊的，そして情熱的，と交互に気持が揺れる．もっとも，あらゆる人間は，一つの行動をとりながらも，その他いろいろ相反する感情，思いを懐いているものである．因みに作品の構成のうえでロレンスはたしかに弱点を示す時がある．ちみつな論理的構成をもったフランスの心理小説に親しんできたわれわれには，ロレンスの人間描写がいかにも粗雑で，登場人物の心理や行為がなんの必然性もなく展開されていくように感じられる．極端にいえば自分の思想を主張するため，その場その場で都合のいいように，登場人物の心理をねじまげたり，かってにある行為から他の行為へと転換させたりしているようにみえる．しかしそういう非難だけでかたづけられないものがあるのだ．

ロレンスは従来の心理主義的方法ではとらえられない人間の正体をとらえようとした．人間の心理のうつりかわりを，だれにも納得のいくように論理的な必然性にそって描いたのでは，本来の人間性はつかめない．もっともらしい理由づけのできないところに心理展開の段落をみいだし，その隙間に食い入らなければ人間の正体はつかめない．ロレンスは小説技法の問題として，そういう事実に気づいたのではなく，日常の生活体験から心理主義の限界を知ったのである．しかしながら，彼女の活動範囲がプロットに合わせるために制限され，それが人間像，物語などに悪い影響を与えている所もある．しかしこの小説の強みは，生き生きした性格描写にあろう．ミス・ピネガー，ミス・フロスト，そしてマネジャーのメイ氏である．そして何といってもアルヴァイナの父ホートンである．チャールズ・ディケンズの作中人物を思わせるのである．

この作品はロレンスの高揚する想像力と思想が，商業主義的成功と争った中から生まれてきたもので，前半の喜劇的物語は実に生き生きしている．小説最後の部分は，やや悲劇的なシリアスな雰囲気を帯びてくる．

思うに読者の共感を得られなかった最大の理由は，彼女の恋人がアレグザンダー・グレアムに始まって，アルバート・ウィザム，そしてミッチェル医師と移行していったことではなく，試行錯誤の果てに，ついにチチオと結婚したことでもない．むしろチチオのアルヴァイナに対する愛は，イタリア人ということを考えれば，決して不自然な事ではない．問題はアルヴァイナがどうしてチチオを愛するようになったのか，これを納得できる形で描いてくれないことである．ということは，チチオの人間像が描か

れていないということになる．アルヴァイナを魅惑し，結婚を決意するに至る理由が弱いのである．したがってチチオの影が薄い，アルヴァイナの独り芝居の印象がある．

しかし一人の女性がいろいろの人生体験を経て，妥協したり，忍従に甘んじることなく，自らの主体性を失うことなく，人間的成長と夫婦愛への過程をたどった物語として，女性の立場からみれば見事な出来映えといえる(30)．ロレンスがこの小説を，みずから〈面白くて道徳的である〉といったのは，このあたりを考えてのことであろうと思われる．そしてこの小説も女性の立場からみた教養小説（Bildungsroman）の一つに数えることができよう．チチオはアルヴァイナの人間的成長過程において，いわば一つの触媒作用の機能を果したと言える．しかし小説として触媒作用だけでは読者に感銘を与えることはできない．男女の人間関係が有機的に説得的過程をたどらなければ，いわゆる試行錯誤の末の理想的結婚は読者に感銘を与えない．自己のアイデンティティを求めて，妥協に甘んずることなく自己に忠実に生きた女性のたどりついた結論であるから，Bennett の *Anna of the Five Towns* のアナのように，女として堪えて堪え忍ぶ一生をたどった小説とは次元の異なる二十世紀的，近代的自我を探究してきただけに，チチオの描写不足，人間像のあいまいさはのがれることはできない．たとえイタリア人で英語がよくしゃべれないということを考慮に入れても，やはり欠点はおおいかくせないだろう．

しかし，ロレンスを性の解放者と考えるだけでなく，この長篇では，中産階級に生まれ，没落し，自活を求め，自力で心の触れ合える男性をみつけて結婚する一人の女性のプロセスが描かれているわけである．美しい，おとなしい女性が，いかに忍従して，やがて幸せになったか，あるいは死んでいったか，という当時のお涙頂戴的な小説の一般的傾向を考えるとき，ロレンスはやはり新しい時代を歩んでいたことがわかる．当時読者が共感するヒロインのイメージとは異質のものであった．

結末の3章はすぐれた筆致である．しかし，小説を書き直した時につけ加えられたといわれる．この結末の部分については，単に書き加えられただけでなく，小説全体が有機的まとまりをもつように，新たに書き直されたと言うべきである．含みをもった open ending となっている．

(11)

芸術作品の評価は，どの時代に生きたかによって，生前全く無視または酷評をうけることがある．つまり時代によって作家の評価は変ってくるということである（政治的な面はこの際考慮に入れないが）．それは古典主義の後には浪漫主義が来るといった文化的流行の交替を言うのではない．これまで顧みられなかった部分が，時代によって，そこに光があてられるのである．

さて小説の最終章で，チチオは第一次大戦にイタリアが参戦することで，応召ということになり軍隊に入る．戦死せずに復員しても，どこに本来の生活の場をみつけるのかは不明である．アルヴァイナがあこがれて来たイタリア山村の故郷も，決して美しく素朴なだけではなかった．二人はまたイギリスに行くのか，アメリカへ移民か，結末は判然としない．

アルヴァイナは，苦境にあって働く時，生き生きとしてくる．男性に盲目的に服従したり妥協することがない．自己の主体性を確保している．そして苦しい状態にあっても，夫をリードして，未来に希望を失うことがない．夫が出征しても必らず生きて帰ると誓わせる．こう考えてみると，ロレンスはこれまでとは異って，統一した構成をもって，女性の identity の探究，近代的自我に目覚めた，男女同権の新しい女性像を描こうとしたと見ることができるのではないか．男と女の深い結びつきを探究した小説と考えることができよう．

近年ロレンス再評価の動きがある．*The Lost*

Girl 再評価は，The Cambridge Edition of D. H. Lawrence が刊行されるや，早々とこの作品が選ばれたことからも，その気運を感じとることができる．

自己を求め，職を求め，資格を求め，深い人間的結合による結婚を求める女性の半生を描いたこの小説は，今日の女性の主体性を求める気運，Feminism の運動の先駆的作品となった．1921年エディンバラ大学から与えられた文学賞は，計らずもすぐれた見識を示したことになるが，果してそういう意味での賞であったかどうかは，今日では測り知れない．そしてこの小説は，ロレンスの他の主要作品 *The Rainbow*, *Women in Love*, *Sons & Lovers* に決して劣らない長篇とみるべきであろう．

注

(1) 本論文におけるテキストからの引用は，すべて Penguin Books 版による

(2) *Ibid.* p. 33.

(3) *Ibid.* p. 14.

(4) *Ibid.* p. 71.

(5) *Ibid.* p. 31.

(6) *Ibid.* p. 71.

(7) *Ibid.* p. 35.

(8) *Ibid.* p. 52.

(9) *Ibid.* p. 58.

(10) *Ibid.* pp. 48～49.

(11) *Ibid.* p. 61.

(12) *Ibid.* p. 146.

(13) *Ibid.* p. 252.

(14) *Ibid.* p. 279.

(15) *Ibid.* p. 280.

(16) *Ibid.* p. 321.

(17) *Ibid.* pp. 340～341.

(18) *Ibid.* p. 347.

(19) *Ibid.* p. 347.

(20) *Ibid.* p. 351.

(21) *Ibid.* p. 351.

(22) *Ibid.* p. 370.

(23) *Ibid.* p. 370.

(24) *Ibid.* p. 370.

(25) *Ibid.* p. 390.

(26) *Ibid.* p. 391.

(27) *Ibid.* p. 397.

(28) *Ibid.* p. 400.

(29) *Cf.* Melvyn Bragg : *The Lost Girl*, Cambridge Edition (1981), Introduction (Granada) John Worthen : *The Lost Girl*, Cambridge Edition (1981), Introduction (Cambridge U. P.)

(30) *Cf.* Carol Dix : *D. H. Lawrence and Women* pp. 43～46 (1980) Macmillan